



ピョンチャンオリンピックも終わりました。日本勢の活躍はとても素晴らしいものがありました。私もテレビにくぎ付けになって応援しましたが、結果はともかくも、競技後の選手の態度や表情にも関心をもって観ていました。

勝っても負けても感激の涙を流しながら、口から出る言葉には「感謝」という言葉がありました。今まで自分を支えてくれた周りのすべての人たちへの感謝の思いなのでしょう。それは競い合った仲間までへのものでもありました。あの500m 競技の小平選手と韓国の選手との姿は「相手と戦うというよりも、記録に挑戦し競いあう」という中で生まれた篤い友情のように感じられました。

「感謝」それは一番、二番と分別する「自我中心の世界観」から「如来中心の世界観」が開かれて来たところに発露されてくる言葉なのではないかと思われました。この世に生を受けたことから始まり、現在の自分に至るまでの間の、あらゆるすべてのご縁の「おかげ」がここにあると自覚されてくるでしょう。

2020年東京。はたしてどんなドラマが生まれるのか。とても楽しみなことです。

◎一切他力・切受容

M M

私は平成七年が六十才の年でしたが、この年から十年目標を設けて取り組むようになりました。その目標とは「自然観照」です。これは自然の姿や、様々な現象をつぶさに観察するものです。その間、いろいろな気づきがありました。木の葉の形に注目したのもその一つでした。木の葉には、実にさまざまな形がありますが、一体この様な形はどのようにして生まれたのかを念頭におきながら、観察してきました。あるときひらめいたのは、自然がよりよく生かすために生み出した形なのだということでした。木の葉の形には、よりよく生かそうとする自然の深い慈愛がこめられていると、いつか気づいたのです。

以来、野外の風景を目にするごとに、しみじみと自然界に働く慈愛を感じるようになりました。これは六十歳代の得がたい収穫でした。

この関連で七十歳代の十年目標は「一切他力・切受容」を設定しました。われわれは自然の慈愛すなわち他力に包まれて生かされている身であることを、日々かみしめようとするものです。

こうして年年他力の自覚が深まっていきましたが、七十八歳の誕生日のとき、曰「ころの心境を「遺憾」としてしたためました。生かされるのも他力なら、死ぬのもまた他力であるとして、合掌のうちに受け入れようとするものです。

一切他力の思いが深まることで、身の回りは仏の慈愛で満たされたものとなり、おかげと感謝三昧の日々を頂くことができるようになりました。

遺 偈

昭和十年 誕生以来 昼も夜も

一秒も休むことなく 生かし続けて

下さいました

ただただ ありがたく感謝のほか

有りません

この先にいただく 命のおわりも

御仏の慈悲のはからいとして

いつでも合掌のうちに

受け入れさせていただきます

南無阿弥陀仏

七八歳誕生日



本年も光受寺の教化活動の一環として、しだれ梅観梅会を開催いたしております。

同時開催としては秀瑤書院展、高橋啓子氏の日本画展を開催いたしております。また恒例のおひな様、つりひな展も行っております。ぜひお立ち寄りください。



竹の船に乗って、花見をしよう。おひなさまも享保雛も展示しています。



秀瑤書院展
三月一日(土)～
三月十一日(日)



K・T
喜寿 日本画展



今月の法語

「無上尊」



境内に咲く
思ふのまのの輪花。

大無量寿経の中に世においで無上尊となるべしといふ言葉が出てまいります。無上尊とは『の上なく尊い』といふことです。ただこれは他と比べて尊いといふことではなごうです。代理のきかない、かけがえのない「のち」をいただきたい生きとしのいの私にあらんやうに尊かれん。

今月の学習会「ライトアップ」

三月十日(土)は観梅会の会期中で、ライトアップと重なっておりますので、観梅をしながらの茶話会といたします。

ライトアップは午後八時から八時までです。(光受寺の境内の梅と光が織りなす別世界をぜひ一度ご覧いただけたらと思います。)

春季永代経

3月21日(水) 午前・午後 お齋有り

今年梅の開花もやや遅いようです。永代経まで咲いていくれているかもしれません。今年若坊守が法話を予定しておりますが、皆さんに楽しんでいただけるよう工夫を凝らして臨むようです。ぜひご参詣お待ちしております。

心が若く

若くは一瞬一瞬の新しい世界との出会いが感動をもたせて迎えられるかどうか、それが基準だと思えます。それは当たり前が、当たり前で無くなる瞬間でもあり、情性で生きるということからの脱却にも通じます。若くは年齢ではなく、心の若くは心だと思えます。

本山奉仕団参加の申し込み

いよいよ6月が締め切りとなります。お早目のお申し込みをお願いします。

一生一度は本山へ。そんな願いを込めてお勧めいたします。話を聞いたり、普段は立ち入ることができない建物内部の見学も致します。奉仕の内容は無理のない軽作業です。住職もこれが最後の上山となります。この機会にぜひ一緒に参拝してください。